

分科会② 「待ったなし！超高齢社会 男性介護者とワーク・ライフ・バランス」

家族構造の変化にともない、性別・仕事の有無・家事能力などにかかわらず誰もが介護に直面する時代を迎え、仕事ひと筋のライフスタイルを見直すことの必要性や、介護も仕事も生活も充実できる豊かな社会・地域づくりについて考えました。

●講師 津止正敏さん

（立命館大学産業社会学部教授、「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」
事務局長，滋賀県男女共同参画審議会委員）

（概要）

- ・ 2010年の国勢調査では、「単身者」世帯が31.2%、初めて「夫婦と子ども（核家族）」世帯（28.7%）を逆転し、最多「世帯」となった。核家族を中心とした制度が制度疲労を起こしている。
- ・ 認知症の人と家族の会の調査（1991年→2010年）では、「2人世帯」が0%から45%に増えている。「60歳以上」の高齢介護者が28.5%から58.2%に増加する一方、介護者が「嫁」という割合は40%から12.8%に減っている。男性介護者は8.2%から32%（3人に1人）に。介護の主体が男か、女かと言っている場合ではない。そばにいるものが介護をしないとイケない。
- ・ 男性介護者の登場は、介護を社会的な文脈へと変える力、社会を変える力となる。
- ・ 男性介護者の実態は、平均年齢69.3歳、介護と自らの病気という二つの負担を背負っている、男性介護者の73.9%が無職で、介護による退職が21.6%。このことから、仕事との両立が困難であることがわかる。
- ・ 本人支援の仕組みだけでは介護者は救われない。「本人支援」＋「介護者支援」という新たな支援フレームが必要である。



（質疑応答）

質問：三世帯同居の社会の仕組みをつくろうという流れはないのか。

回答：以前、住宅政策で三世帯同居を進めるといったものがあったが、グローバル社会を迎え、子どもたちは外へ外へと出て行ってしまい、帰ってこいとはいえない状況となっている。